

得点の起点となったプレーを伝えるサッカー中継

Focus on the Trigger Play to Score in Football Broadcasting Programs

トップスポーツマネジメントコース

5022A-321-0 福西崇史

研究指導教員：平田 竹男 教授

1. 背景

サッカー中継において視聴者が解説者に求める内容は、サッカー黎明期ではオフサイドのルールや注目の選手の説明といった基本的な内容であったが、サッカーW杯の試合中継で30%以上の視聴率を獲得する昨今では相手の背後を取る動きや守備の陣形等の戦術の解説をすることが当たり前になってきている。さらに2022年カタールW杯のアジア予選をDAZN、本大会をABEMAが配信を行ったようにOTTの台頭によって視聴者層が多様化し、異なる視聴ニーズに応じたサッカー中継の番組作りが求められている状況である。

筆者はJリーグジュビロ磐田等でボランチとしてプレーし、2002年日韓W杯、2006年ドイツW杯に出場し、引退後は、サッカー解説者として2010年大会以降4大会連続でNHKの解説を行った。サッカー中継の解説をより魅力的にするには、得点場面だけでなく、得点から遡り起点となった場面の解説が重要であると考えている。得点の起点に焦点を当てた解説ができれば、サッカー中継の質の向上だけでなく、筆者が経験したボランチをはじめ従来あまり言及されてこなかったポジションの選手にも注目が集まることが期待される。

スポーツ中継に関する研究として三宅(2003)や多々良(2015)等、実況者と解説者のやり取りを分析した研究が行われていたが、いずれも両者の関係性を示すものに留まっていた。

2. 目的

サッカー中継の得点場面における実況者や解説者の言及内容を明らかにし、得点の起点となったプレーを解説できる機会を増やす方法を探ることを目的とする。

3. 方法

1) 2022年W杯アジア最終予選全12得点の調査

日本代表が得点した8試合全12得点を対象に得点の起点に対するリプレイ映像の有無、起点からアシストまでのプレー回数(以下、起点数)、DAZN(以下、D社)とテレビ朝日(以下、テレ朝)の実況者、解説者の言及内容の調査を行った。

2) 2022年カタールW杯本大会全5得点の言及

1)の方法で地上波とABEMA(以下、A社)の言及内容を調査

3) サッカー中継番組製作者へのインタビュー調査

サッカー中継番組の制作関係者2名に対して、試合中のリプレイ場面の採用基準等の質問を行った。

4) その他

海外のサッカー番組や個人やJリーグ、JFA等のYouTubeチャンネル、A社のハイライト番組の内容について調べた。

4. 結果

1) カタールW杯アジア最終予選全12得点の起点

全12得点のうち起点数1未満が6得点あったが、ゴール前

の展開であり必ずしも起点を言及する必要がない得点であった。起点数3以上の6得点には起点を遡る必要があった。DAZNでは6得点のうちリプレイ映像に起点があったのは1得点のみで実況者・解説者の言及があり、リプレイ映像がない5得点のうち4得点に起点の言及があった。地上波では放送があった4得点のうち1得点に起点の言及があった。

表1 カタールW杯アジア最終予選全12得点の起点

| 試合結果 | 起点から得点までのプレー内容 | 起点数 | 映像 | 地上波 | | DAZN | |
|----------------------|---|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| | | | | 実況 | 解説 | 実況 | 解説 |
| 2節中国戦(A) 1-0○ | 伊東(FW)→大迫→G | 0 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 4節豪州(H) 2-1○ | 吉田(FW)→田中→G 吉田(DF)→浅野→相手→G | 0 1 | ○ ○ | ○ - | ○ - | ○ - | ○ - |
| 5節ベトナム(A) 1-0○ | 大迫(FW)→南野→伊東→G | 1 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 6節オーストラリア(A) 1-0○ | 中山(DF)→三笥→伊東→G | 1 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 7節中国(H) 2-0○ | 守田(MF)→遠藤→酒井→伊東→ハンド→大迫(PK)→G 中山(DF)→伊東→G | 4 0 | - ○ | - ○ | - ○ | ○ ○ | ○ ○ |
| 8節サウジアラビア(H) 2-0○ | 遠藤(MF)→伊東→酒井→伊東→南野→G 守田(MF)→伊東→遠藤→南野→長友→伊東→G | 3 4 | - ○ | ○ - | - - | ○ ○ | - ○ |
| 9節豪州(A) 2-0○ | 守田(MF)→山根→守田→山根→三笥→G 守田(MF)→三笥→中山→原口→三笥→G | 3 3 | ○ - | ○ - | ○ - | ○ ○ | ○ ○ |
| 10節ベトナム(H) 1-1▲ | 吉田(DF)→久保→原口→相手GK→吉田→G | 3 | - | ○ | ○ | ○ | ○ |

(A):アウェイ戦 (H)ホーム戦 →:パス =:守備 ○:フリーランニング G:ゴール \:中継なし

(1) ホーム戦3試合4得点(放送:DAZN、テレビ朝日)

① DAZNとテレビ朝日で起点の言及があった1得点

10節ベトナム戦は「吉田→久保→原口→相手GK→吉田→ゴール」であり、吉田選手がパスカットをしてドリブルで持ち上がったプレーが起点となった。D社では、解説者の佐藤寿人氏が「この同点ゴールの起点も吉田のパスカットから始まっています」と述べ、テレ朝でも解説者の松木安太郎氏が「いや、今ね、自らね、インターセプトして、サイドにボールを散らして、そこから中へ入ってきましたからね。」と言及した。

② DAZNのみに起点の言及があった2得点

第8節サウジアラビア(以下、サウジ)戦の2点目は「守田=伊東=遠藤→南野→長友→伊東→G」であり、守田選手から遠藤選手までの組織的な守備が起点となった。この起点に対してD社では「プレスバック」という専門用語を実況者が使い、解説者の佐藤氏も「守備の強度」について言及した。一方テレ朝では解説の松木氏が「ワールドクラスだ」と呼び、伊東選手のシュートの豪快さについてのみ触れた。

第7節中国戦は「守田→遠藤→酒井→伊東→ハンド→PK」であり、守田選手の縦パスを受けた遠藤選手が反転して前を向いたプレーが起点となった。この起点に対してD社では「ハーフスペース」という専門用語を実況者が使い、解説者の中村憲剛氏が「その前に遠藤航が入れた守田への斜めのくさび(のパス)が非常によかった。」と言及した。テレ朝ではハンドとなった場面について言及した。

③ DAZNと地上波で言及がなかった1得点

第8節サウジ戦の1点目は「遠藤→伊東→酒井→伊東→南

野→G」であり、遠藤選手の伊東選手への縦パスが起点となったが、アシストした伊東選手が相手に競り勝った場面

DAZN、テレ朝も実況者・解説者が言及した。

(2) 9節アウェイ豪州戦の2得点(放送:DAZNのみ)

① リプレイ映像があり得点の言及があった1得点

1点目は「守田⇒山根⇒守田⇒山根⇒三笥⇒ゴール」であり、守田選手が山根選手に向かって動き出しボールを保持したことが起点となった。リプレイ映像は起点のプレーから流れ、実況者は「まず、ボックス内半身で憲剛さん、守田が受けて、そこから崩していきましたね。」と言及し、解説者の中村氏が守田選手と山根選手のプレーについて言及した。

② リプレイ映像がなく起点の解説があった1得点

2点目は「守田⇒三笥⇒中山⇒原口⇒三笥⇒ゴール」であり、守田選手が右サイドから中央へのドリブルが起点となった。リプレイ映像はなかったが解説者の中村氏が「守田の運びが非常によかったですね」と言及した。

2) カタール W 杯本大会全 5 得点の起点

表 2 カタール W 杯本大会全 5 得点の起点

| 試合結果 | 時間 | 起点から得点までの流れ | 起点数 | ABEMA | | 地上波 | |
|-------|-----|---------------------|-----|-------|-------|-----|----|
| | | | | 映像 | 実況 解説 | 実況 | 解説 |
| ドイツ | 75分 | 三笥→南野→相手GK→堂安→G | 2 | ○ | ○ | ○ | - |
| 2-1○ | 83分 | 坂倉→浅野→G | 0 | ○ | - | ○ | - |
| スペイン | 48分 | 前田=鎌田=三笥=前田=伊東→堂安→G | 4 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 2-1○ | 51分 | 権田→伊東→田中→堂安→三笥→田中→G | 4 | - | - | - | - |
| クロアチア | 81分 | 堂安→鎌田→伊東→堂安→吉田→前田→G | 4 | ○ | ○ | - | ○ |
| 1-1○ | | | | | | | |

→:パス =:組織的な守備 G:ゴール

(1) スペイン戦の2得点(放送:ABEMA、フジテレビ)

全5得点のうちドイツ戦の1点目はゴール前の得点、ドイツ戦の2点目とクロアチア戦の得点はセットプレーからの得点であり、起点を言及する必要がない得点であった。スペイン戦の2得点は得点の起点を遡る必要がある得点であったがA社とフジテレビ(以下、フジ)の言及内容に差はなかった。

① 起点のリプレイ映像と言及があったスペイン戦1点目

1点目は「鎌田=三笥=前田=伊東→堂安→ゴール」であり、起点となった鎌田選手から伊東選手までの一連の守備についてA社、フジともに言及をしていた。

② 起点のリプレイ映像も言及もなかったスペイン戦2点目

2点目は「権田→伊東→田中→堂安→三笥→田中→ゴール」であり、GK権田選手のロングフィードが起点となった。しかし、1点目の直後の場面であったため中継画面ではまだ1点目に喜ぶ観客の様子が映されていたこと、三笥選手のVAR判定に注目が集まったことも重なり言及がなかった。

(2) 2022年カタールW杯本大会のリプレイ映像

国際映像からのリプレイ映像は、5得点のうち4得点のリプレイの最初に得点の起点となる場面から始まり、選手の関係性が見えるような画角の広い映像が採用されていた。

3) TV番組制作者へのインタビュー

リプレイ映像はVTRの制作スタッフが2、3人で担当し、映像使用の決定権はディレクターにあった。映像の切り出し方について「起点」という解釈を踏まえた指示は難しいが、アシストとなる場面の2つ、3つ前の場面を遡るという指示で

あれば実現性が高まるということが指摘された。

4) その他

欧州ではハイライト番組での解説が主流であった。JリーグがYouTubeで試合映像を使用した番組を自主制作していた。

5. 考察

1) 得点の起点の解説の実施状況

得点の起点のリプレイ映像があれば、OTTでも地上波でも起点の解説が行われていたことから、リプレイ映像に起点が映り込むことが重要である。

2) リプレイ映像の改善

海外の会社が制作するカタールW杯本大会のリプレイ映像では起点の場面から映し出され起点の解説がしやすい映像であったが、日本の会社が制作するアジア予選の映像ではゴール前の展開から映し出される傾向にあり起点の解説を浸透させる上での課題と言える。今後、映像制作スタッフに対しアシストとなる場面の3つ、4つ前に遡っての切り出しを標準とする指示が行われ、近い将来得点の起点がリプレイ映像に映り込むことが常識化することが重要である。

3) 実況者と解説者の連携による起点の解説

仮にリプレイ映像がなくても実況者が解説者に話題を振るような連携が取れば得点の起点の解説が可能である。

4) 番組制作関係者の意思統一

サッカー中継において得点の起点への言及を増やす為には、起点の言及が重要との番組関係者(特にディレクター、実況者、解説者)全員の意思統一が必要となる。

5) ハイライト番組の可能性

欧州のようにハイライト番組を充実させることも重要な方法であり、試合映像の権利を有するリーグ等の主催者や、放送局、OTTと連携しテレビだけでなくYouTubeやSNSでの配信も含めて幅広く検討すべきである。

6) OTTの可能性

地上波よりもOTTの方が、専門用語が使われ、起点の解説が行われていたことから、OTTでのサッカー中継では放送時間の枠や実況者と解説者の形式に拘らず、得点の起点の解説をはじめ新たなサッカー中継のあり方を模索すべきである。

7) 得点の起点となった選手に注目を集める方法

MOM(Man of the Match)やMVPのように起点となった選手に賞を与えるような取り組みを提案したい。「起点者」

(仮)を設けることで視聴者だけでなく指導者やサッカーキッズの保護者も起点に注目が集まることが期待されることからグラスルーツからの浸透を考えたい。

6. 結論

日本サッカーの将来のためには得点シーンのみならず起点となったプレーに焦点を当てることが重要である。リプレイ映像の工夫等によりサッカー中継の実況、解説において得点の起点となったプレーへの言及増加が可能である。サッカー界としても中継や報道を容易とするように、起点者を記録に残すなどの工夫が必要である。